茨城高等学校・中学校

校長室だより　　２０２５年6月２７日

八月十三日の神鷲

昨年の夏に書いた校長室だより「楽園のゲルニカ」を読んでくださったという、茨城県稲敷郡阿見町にある予科練平和記念館で歴史調査員をされている大貫さんから、知人を介して入場招待券をいただきました。せっかくなので文化祭・体育祭の半日代休となった6月10日の午後、記念館を訪問させていただきました。関東地方の梅雨入りが発表された日で、駐車場に着いたときには大粒の雨がフロントガラスを濡らしていました。奇(く)しくも6月10日は、米軍による大規模空襲によって、民間人を含む多くの犠牲者が出た阿見町空襲からちょうど80年という節目であることを記念館入り口の掲示で知りました。

「“予科練”とは、正式には“海軍飛行予科練習生”といい、旧日本海軍の戦力の中核となる航空機搭乗員を養成する制度のことです」と記念館のHPでは説明されています。第一次世界大戦以降、航空機は偵察、爆撃、戦闘など様々な用途で用いられるようになり、その需要が高まっていきました。ヨーロッパ列強に遅れを取るまいと、旧日本海軍が若者に訓練を施し、優秀な搭乗員を育てようとして生まれたのが「予科練」です。14歳から17歳という、現在の中学生、高校生にあたる少年たちを試験で選抜し、航空機の搭乗員としての基礎訓練をおこなったのです。予科練の、桜と錨(いかり)をあしらった七つボタンの制服は、空を目指した少年たちにとって憧れの的でした。

予科練が、神奈川県横須賀から土浦海軍航空隊のあった阿見町に移転してきたのは1939年（昭和14年）、ヨーロッパではナチスドイツがポーランドに侵攻を開始し、第二次世界大戦が勃発した年でした。日本では日中戦争が泥沼化し、軍事的、経済的苦境を打破する方策が模索されていました。

阿見町の予科練平和記念館は、予科練の歴史や戦争の記録を保存、展示し、次の世代へ伝えることを目的に、旧予科練跡地に2010年に開館しました。自分が訪れた時には、開館15周年記念の特別展「ペンを剣にかえて-海軍予備学生の軌跡-」が展示されていました。

太平洋戦争開戦から2年後の1943年、当時の東条内閣は、ミッドウエー海戦以降劣勢に立つようになった旧日本軍の兵力不足を補うため、それまで徴兵が見送られていた大学や高等専門学校に在籍する20歳以上の学生に対する徴兵猶予を停止しました。いわゆる学徒出陣の始まりです。臨時徴兵検査を経て陸海軍への入営が決まった学生たちは、明治神宮外苑競技場、現在の国立競技場で「学徒出陣壮行会」に臨みました。土砂降りの雨の中、学生服、学生帽を身につけた青年たちが、足にはゲートルを巻き、銃剣を担いで競技場を行進する映像を観たことはないでしょうか？

将来の日本を支える頭脳として期待されていた若者たちは、志半ばでペンを剣に持ちかえ戦

場に赴きました。彼らは大幅に短縮された訓練を受けるとすぐに第一線に配置され、結果、多くの若い命が失われました。その中には、海軍飛行予備学生として土浦海軍航空隊で訓練を受け、この後述べる特攻作戦に殉じた若者たちも少なからず含まれていたのです。

予科練平和記念館には、「入隊」「訓練」「心情」「飛翔」「交流」「窮迫」「特攻」の7つの常設展示室があります。自分は各展示室をそれぞれ興味深く見学させていただきましたが、やはり何と言っても最も強いインパクトを受けたのは最後の「特攻」の展示でした。展示室では、今まさに特攻に出撃しようとする若者が、上官と別れの水杯を交わした後、飛行機に乗り込み、次々と飛行場を飛び立っていく映像が流れていました。

特別攻撃、特攻とは、太平洋戦争末期にアメリカの猛攻の前に敗退を重ねた日本軍が最後の切り札として選択した作戦です。爆弾を積んだ航空機や魚雷などに人員が乗り込み、そのまま敵艦に体当たりをするという戦法です。零戦など航空機で体当たりする「神風」が有名ですが、他にも航空機に吊り下げられた状態から投下されるロケット噴射のついた一人乗りのグライダー「桜花」、潜水艦から発射される人間魚雷「回天」、爆雷を積んだモーターボートで敵艦に突っ込む「震洋」など、さまざまな特攻兵器が考案、開発されました。

特攻は、十死零生、つまり100パーセント死を前提とした作戦です。搭乗員たちはひとたび出撃すれば、生還する可能性はありません。戦争ですから、作戦遂行中に死亡することはあるでしょう。しかし、「命がけで爆弾を敵艦に命中させてこい」というのと「命を捨てて爆弾とともに敵艦に突っ込め」というのは全く違います。いかに戦時中とはいいながら、死ぬことが必須の作戦を決行し、兵士に「死んでこい」という命令を下したのは、第二次世界大戦当時、大日本帝国のみでした。特攻隊編成を命じた大西瀧治郎中将自身が「特攻は統率の外道(げどう)」と呼んだほど、常軌(じょうき)を逸(いつ)した作戦だったのです。

特攻作戦が初めて実行に移されたのは、1944年のフィリピン・レイテ沖海戦においてのことです。10月25日午前10時50分、ルソン島マバラカット飛行場を飛び立った神風特別攻撃隊敷島(しきしま)隊が零式戦闘機5機で敵艦隊に突入し、空母1隻を撃沈するなどの戦果をあげました。最初の特攻を行った敷島隊の隊員は、隊長の関行男大尉23歳、中野磐雄一等飛行兵曹19歳、谷暢夫一等飛行兵曹20歳、永峰肇飛行兵長19歳、大黒繁男上等飛行兵20歳の5名でした。海軍兵学校出身の関大尉以外の4名は、霞ヶ浦で基礎訓練を受けた土浦海軍航空隊予科練出身の若者たちでした。

その後、海軍は特攻を組織的かつ大規模に展開し、陸軍もこれに続きました。太平洋戦争末期において、特攻は日本軍の主要な「作戦」となったのです。終戦までに特攻によって失われた人命は、6千とも7千とも言われています。そしてそのほとんどが、10代、20代の若者たちでした。特攻は、出撃すれば必ず死ぬ作戦です。そこに通常の作戦でも戦果をあげる可能性のある熟練の搭乗員をあてることは人材の損耗(そんもう)を意味します。また、厳格なヒエラルキー社会である軍組織において、将来幹部となる士官学校や兵学校出身の職業軍人は特攻から除外されるケースが多かったともいわれています。結果、学徒出身者や将来幹部にはなりにくい予科練出身の若者が、特攻隊員として多く選ばれていった、という説があります。

鹿児島県の知覧(ちらん)飛行場は、旧陸軍神風特攻隊の基地でした。米軍が沖縄上陸作戦を開始した1945年3月から6月にかけて、知覧基地からは特別攻撃隊四百数十機が沖縄周辺のアメリ

力艦隊に向けて飛び立ちました。

知覧から出撃した特攻隊員の一人に、宮川三郎少尉がいます。宮川少尉は、新潟県立工業学校を卒業した後、働きながら受験した慶應義塾大学工学部、早稲田大学工学部の両方に合格した秀才でした。運動神経も抜群で性格温厚な宮川青年は周囲の人気者だったといいます。戦局が緊迫する中、宮川青年は大学には進学せず航空機搭乗員養成所を経て陸軍特攻隊に志願し、知覧基地に赴任したのでした。当時、知覧の町で食堂を営む鳥濱トメという女性がいました。彼女の切り盛りする「富屋食堂」には、多くの特攻隊員が訪れ、トメさんはそんな隊員たちを我が子のようにかわいがり、もてなしました。いつしかトメさんは年若い隊員たちに「お母さん」と呼ばれるようになっていきます。宮川青年もそんな隊員の一人でした。

１９４５年６月５日、二十歳の誕生日であったその日、宮川少尉に翌日の出撃命令が下ります。出撃前夜、トメさんは宮川少尉たちに誕生祝いと出撃のはなむけを兼ねて心づくしの手料理をふるまいました。その夜、空襲警報が鳴り、宮川少尉をはじめ何人かの隊員とトメさん、そしてトメさんの二人の娘たちは、近くの防空壕に避難します。警報が解除され防空壕を出たとき、宮川少尉たちは数匹の蛍がはかない光を放ちながら飛び交う情景を目にします。その蛍にじっと見入りながら宮川少尉は「おばちゃん、俺、心残りのことはなんにもないけど、死んだらまた、おばちゃんのところへ帰ってきたい。俺、この蛍になって帰ってくるよ。」と約束したといいます。そして「明日の晩９時に帰ってくるから、店の正面の引き戸を少し開けておいてくれよ」とも言ったそうです。

次の日の夜、トメさんが食堂の片付けをしていると、ラジオから９時のニュースが流れました。すると、わずかに開いた表戸の隙間から一匹の大きな蛍が入ってきたといいます。二人の娘たちはそれに気づき、「お母さん、宮川さんよ、宮川さんが帰ってきたわよ」と叫び、トメさんは息をのんで蛍を見つめました。やがて店にいた特攻隊員たちの誰からともなく、軍歌「同期の桜」が歌い出されたといいます。

この宮川少尉のエピソードは、さまざまな小説や映画のモチーフとなりました。２００１年に公開された高倉健さん主演の映画「ホタル」もその一つです。「ホタル」では、食堂の中を飛ぶホタルを見た特攻隊員たちが「同期の桜」を歌うのではなく、「みやがわー、みやがわー」と呼びかけるというストーリーになっていました。

同じく映画「ホタル」では、トメさんをモデルにした食堂の女将（おかみ）が、戦後、年老いて食堂を引退することとなり、その「送る会」が催される場面が描かれています。「皆さん、特攻隊の方々を決して忘れないでください。語り継いでいってください」と無難にあいさつを終えた女将に、特攻隊員の孫の十代の少女が花束を贈ります。その少女を前にしたとき、女将の目に涙が浮かびます。「ちょうどこんなんだったんよ。若々しくて素敵なあん人たちから夢も楽しみも奪い取って、お国のためだ、万歳、万歳言うて日の丸の旗振って送り出したんよお」と感情をあらわにした女将は、さらに「殺したんだあ！実の母親だったら我が子に死ねとは言わんでしょう。どんなことがあったって、自分の身を捨ててでも子どもを守るでしょう！」と慟哭（どうこく）します。なんとも言えず切なく印象深い場面として記憶に残っています

本校の理事会室の書棚に『八月十三日の神鷲-陸軍大尉・横山善次-』という本がひっそりと並んでいます。著者は横山孝一氏、発行者は横山充孝氏で平成６年に個人出版された本です。「神鷲」は「しんしゅう」と読み、太平洋戦争で散った特攻隊員たちを指すことばです。戦時下の新

聞は彼らを「神鷲の忠烈、万世に燦たり（特攻の勇士たちの熱烈に国を思う心は永遠に燦然と輝く）」とたたえ、国民の戦意高揚を図ったのでした。

『八月十三日の神鷲』は、特攻で亡くなった横山善次さんの22年の生涯を記録したものです。水戸市に生まれた善次さんは、陸軍第一航空軍第二〇一隊に所属する優秀な航空機パイロットでした。戦局が悪化する中、善次さんは特攻を任務とする「神鷲隊」に志願します。そして1945年8月13日、出撃命令を受けた善次さんは友軍機とともに栃木県黒磯市の基地を飛び立ち、午後5時40分、茨城県鹿島灘東方洋上にあった米機動艦隊に突入したのです。それは日本が終戦を迎えるわずか二日前でした。

当時、12歳年の離れた善次さんの弟、横山充孝少年は水戸を離れ当時の大賀村、現在の常陸大宮市大賀に疎開していました。黒磯から鹿島灘に向かう途中、善次さんは、かわいがっていた弟に別れを告げるように、充孝少年の疎開先である大賀村の上空のルートを飛びました。このことは弟の充孝さんの証言からも裏付けられます。充孝さんは、その日友人と魚取りに出かけていたのですが、ふと顔をあげた時、日が傾きかけた空に二機の戦闘機が並んで飛んでいくのを見ました。その記憶がはっきり残っているといいます。その後、善次さんは、進路を水戸に向け、現在の水戸市下市にあった懐かしい生家の上空を旋回し、鹿島灘へと向かったのです。

実は、横山善次さんは旧制茨城中学校第13回卒業生です。今君たちが学校生活を送るこの水戸市八幡町の学び舎で十代を過ごしました。特攻は、あの戦争は、遠い昔の別世界の出来事ではなく、私たちのすぐそばに存在したのです。特攻に赴く兄の飛行機を見送った充孝さんも、戦後、茨城中学校、茨城高等学校を卒業しました。そして平成12年から茨城高校・中学の理事長も務められました。『八月十三日の神鷲』は充孝さんの長男の横山孝一さんによって書かれたものです。孝一さんは、あとがきの中でこう述べています。「本書は、当時の時代背景を描きながら、横山善次大尉という一特攻隊員の心に迫りました。自分の命を投げ捨ててまで守ろうとしたものが何であったか考えてみました。･･･中略･･･特攻隊員たちには共通して優しい母親と立派な父親がいたのです。つまり、かれらには感謝の対象として温かい家庭が存在し、それを守るために死んでもかまわないと思ったわけです。かれらの思い描く“国家”とはその家族の投影であり、やさしいお母さんのイメージでとらえられていたのです」

数知れぬ尊い人命が犠牲となったあの戦争から80年が経とうとしています。戦争を経験した人たちが年々少なくなっていく中で、戦争の記憶をいかに継承していくかは切実な課題です。近年、若者の戦争への無関心が話題となることがあります。以前、東京の渋谷を歩く若者たちに「8月15日は何の日か分かりますか？」というインタビューを行ったところ、正しく「終戦記念日」と答えられたのは3割程度だったというニュースを見て驚いた覚えがあります。一方で、中には「悲しい気持ちになるから」「残酷で怖いから」などの理由から、戦争について知りたくない、戦争の小説や映画は見たくない、という人もいるようです。現役の国会議員の、沖縄ひめゆり平和祈念館の展示を巡る歴史修正とも受け取れる発言が問題となったことも記憶に新しいところです。

未来は過去の集積の上になりたちます。過去を知る、歴史を学ぶ意義はそこにあります。私たちは好むと好まざるとに関わらず、80年前のあの戦争の延長線上に存在しています。かつて人々が大きな苦難と悲しみを経験した時代が存在し、その犠牲のうえに私たちの生きる平和な現在があるという事実から、私たちは誰一人無関係ではいられません。

その中で、国家のため、愛する人たちを守るために散っていった特攻隊員たちの物語も語り継

がれなければなりません。そこで注意すべきなのは、特攻隊員一人一人の崇高な自己犠牲が、戦争行為の賛美、まして戦争肯定論と混同されてはならない、ということです。特攻隊の資料を前にするとき、映画「ホタル」の食堂の女将の「殺したんじゃあ！」という慟哭が胸の中によみがえります。彼らが、国家、戦争という巨大な怪物によって人生を奪われた意味について、私たちは考え続けなければなりません。

最後に、特攻隊として散華していった若者たちは日本人だけではなかったという事実を記してペンを置きたいと思います。特攻隊には当時日本の統治下にあった朝鮮半島や台湾出身の若者も少なからず含まれていました。このことは、戦後、特攻が彼らの母国で「反民族行為」としてとらえられ、家族が遺骨や遺品の受け取りを拒むといった新たな問題も生じさせました。阿見町の予科練平和記念館の壁には、朝鮮半島出身の元特攻隊員の一人、劉（りゅう） 連輝（れんき）さんのことばが記されていました。

今回の「校長室だより」が、生徒諸君にとって80年前の戦争について、そして未来の平和について考える小さなきっかけとなれば幸いです。

「あの戦争はもう遠い昔の物語となった。半世紀以上に渡る経過で、国・社会・人間は様々に変わったが、是非は別に、国の為、陛下の為、親兄弟の為に敵と相打つ覚悟で特攻隊員たらんと志願入隊した私達は、純粋無垢な少年だった事は確かであり、それはいくら期間の風化でも変えられない私達の歴史の一節である

特別丙種第一期予科練習生　劉連輝さんのことば」

※「校長室だより」は、本校のＨＰにも掲載しています。バックナンバーを読みたい人は、ＨＰの「学校案内」→「校長室だより」からどうぞ。